

# 「さやけし」の周辺

野田浩子

## ——「清なる自然」試論2——

### (一) はじめに

『万葉集』の自然は「清なるもの」に於て顕著であるといわれたのは高木市之助氏であった。<sup>1</sup> いわれる通り「へきよし」<sup>2</sup>「へさやけし」<sup>3</sup>は自然を対象として『万葉集』に於て多用されるのだが、同時に「へきよし」<sup>4</sup>「へさやけし」<sup>5</sup>は宮廷讃歌ことに従駕歌を中心に偏用され、その消長を共にする。<sup>2</sup> 赤人に代表される所謂叙景歌は、従駕歌や宮都讃歌が中心であり、天皇讃仰の枠内に位置づけられるものである。自然を詠むということが、『万葉集』に於ていかなる意味をもちうるのかは、赤人の所謂叙景歌の位置づけと別のものではない。そしてその自然が「清なるもの」に於て顕著であるからには「へきよし」<sup>6</sup>「へさやけし」<sup>7</sup>の語としての機能を探ることは、所謂叙景歌の意味を考えるに有効なのではないか。「清なる自然」——『万葉集』で「へきよし」<sup>8</sup>「へさやけし」<sup>9</sup>と歌われた自然——の意味や機能を捉えてみたいというのが私の意図であるが、「へきよし」<sup>10</sup>についてはその最も早い用例である人麻呂の吉野従駕歌（1・三〇元）を中心に別々に考えたことがあるので、本稿では「へさやけし」<sup>11</sup>について考えてみたい。

### (二) 「へきよし」と「へさやけし」1

とらりのむとめ おほみとも  
舍人娘子従駕にして作れる歌

A 大夫が得物矢手挿み立ち向かひ射る円方は見るにさやけし

（1・六）

「へきよし」の最も早い用例である人麻呂の吉野従駕歌と並んで、第二期のものと判る「へさやけし」の唯一の例である。従駕歌という点も共通する。また、人麻呂の吉野従駕作は「やすみしし わご大君の 聞し食す 天の下に 国はしも 多にあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の国の……」と多くの中から特に吉野の国を選んだと始まり、舒明作の「大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山」（1・三）と対応する国見歌の型を踏み、当面歌も「見るにさやけし」とあって、国見歌の型を踏む点も共通する。「見るにさやけし」は「見ればさやかに見ゆ」であり、「見る」主体は天皇と考えてよいであろう。<sup>4</sup> 「へさやけし」は「へきよし」と類同されて用いられる語であるから、当面歌は人麻呂の吉野従駕歌と内容・状況を共通させている。<sup>5</sup>

人麻呂の吉野從駕歌の「へきよし」は「山川の清き河内と御心を吉野の国の花散らふ秋津の野辺に宮柱太敷きませば」と続き、山川の清き河内と天皇が御心によしとされて（あるいは御心を寄せられて）という文脈であり、以下には宮殿が築かれた結果大宮人の行き通う繁栄が齎らされたと続くのであるから、山川が清いということは山川への讃辞であると同時に、それを受け入れて宮殿を建てる天皇への讃辞にもなる。この二重の讃辞であるということは景を歌う短歌がそれを手中に収めている天皇への讃辞になるという赤人の所謂叙景歌を理解する要でもある。そこに「へきよし」が用いられていることは特に注意すべきであろう。

宣命等に現れる「清明心」を元来は地方首長の天皇への服属儀礼に発し、社会の変革に伴って官人の服務倫理（天皇への忠誠心）となったもので、「仕へ奉る」の抽象化した表現であるといわれたのは呉哲男氏である。<sup>6</sup> 人麻呂吉野從駕歌の第二長歌は山川の神々の天皇への奉仕のさまを歌っている。

また、「清き河内」は第二長歌では「激つ河内」と歌われ、その反歌では「神ながら激つ河内に船出せず」と天皇の超越した力を讃えている。つまり、普通では制御できない激しい力をもつ川を「神ながら」であるが故に制御していると天皇を山川の神々の上に据えて讃えているのだが、その川の神は並では制御できぬ力もち、その神々が奉仕するのだから天皇の力は超越絶対なるものであるということになる。いわば、「清き河内と御心を吉野国」とは激しい力をもつ川の神の清明心を天皇が受納したということになるのである。

作歌時期や状況を同じくする当面歌が、右のような重要な鍵をも

つ「へきよし」と類同する「へさやけし」を用いているのだから、同様に解釈できるのではないか。即ち、円方の地はさやけきものであり天皇はそれを受け入れた、というのが「円方を見るにさやけし」であろう。「射る」までが「円方」を引き出す序であるが、その意味は下句にかかわらないのであろうか。「大夫が得物矢手挿み立ち向かひ」は矢を向けた武者の姿である。武力を向ける程の威力をもつ円方の意ではないのか。国見は天皇の国占めである。行幸は観念として国覓を背負っている。とすれば武威を向けるというのを観念として描くことは可能であろう。まづるはぬ人々を言向けに出かける倭健命が武装しているように。もちろん倭健命には実質的武力征圧もありえたであろうし、持統朝の行幸はそれと同列ではなからう。が、行幸が国覓を観念として背負っていれば武威の表現もありえよう。「大夫が得物矢手挿み立ち向かひ射る」は円方の地の力あるさまの表現と読めるのではないか。そして「へさやけし」が「へきよし」と同様の働きをする語なら、天皇が武威を向ける程の威力ある円方、しかし円方は「へさやけき」地であることを天皇は認めた。つまり「へさやけし」ということによって武力制圧は実施されずに、天皇治下に位置づけられるということであろう。円方の地がさやかであるという土地讃めと天皇がみるからさやかであるという天皇讃めとの二重の表現である。

このような二重構造は從駕歌や宮都讃歌にしばしば見られる。

a 今造る久邇の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし

(6・1037)

a 田跡川の滝を清みか古やゆ宮仕へむ多芸の野の上に

(6・105)

b やすみしし わご大君の 見し給ふ 吉野の宮は 山高み 雲  
そたな引く 川速み 瀬の音そ清き 神さびて 見れば貴く  
宣しなへ 見ればさやけし…… (6・105)

(6・106)

c 神代より吉野の宮にあり通ひ高知らせるは山川をよみ  
b やすみしし わご大君の 神ながら 高知ろしめす 印南野  
の 大海の原の 荒栲の 藤井の浦に……浦を良み 諾も釣  
はす 浜を良み 諾も塩焼く あり通ひ 見ますもしるし  
清き白波 (6・93)

c' 沖つ波辺波を安み漁すと藤江の浦に船を動ける (6・9元)

a a' は家持作、b c b' c' は赤人作。a は久邇新京讚歌、他は從駕作。a' c' は「さやけし」 a' c' は「さよよし」が用いられているもの。a は山川のさやけきことが天皇統治の根拠となっている。a' は「さやけし」の代りに「清し」が用いられている同様のもの。b は吉野從駕作、c はその反歌。c' では神代以来の天皇統治の根拠を「山川をよみ」としており、「よし」の内容はbで貴く、さやかであるとしている。が、bは冒頭に「やすみししわご大君の見し給ふ」とあって天皇が統治なさるから山川が素晴らしいともよめる。c' はb'の反歌、c'の「安み」を中西進氏は「間接の天皇讚美」としておられる。天皇の行幸によって、この地は安じて漁に勤めるということであろう。b'は天皇統治下の藤井の浦は浜がよく漁でにぎわっている、天皇が通い続けて御覧になるのもっともだこの清き白浜よ、となっていて、天皇統治下だから良い土地だと始まり、土地の

良さが天皇を招いたという結びになっている。「さよよし」は漢詩文の「清」と対応し、天皇の徳の及んでいる地という意であるといわれるが、a' c'の歌から「さやけし」も同様の語であるといえよう。さらに、「さよよし」「さやけし」はこれら(a' c'も含めて)の歌を見ると単に天皇統治下であるというだけでなく、土地の良さが天皇を引き寄せたともよめるのである。山川が「さよよし」「さやけし」であるから天皇が宮を作った(行幸した)のか、天皇が宮を作った(行幸した)から「さよよし」「さやけし」なのか判然とした文脈になっている。「さよよし」「さやけし」が二重の讚辞であるという所以である。

「さよよし」は天皇の徳の及んだという意で、天皇の領有する地であるが故に「さよよし」である、あるいは土地を讚めることがそれを領有する天皇讚めになるというに止まらず、土地の良さが天皇を招き寄せたという積極性も含んでいる。「さやけし」が同様であることは右に於て確かめ得たと思われるが、その際「さやけし」は土地の風光に關してのものに止まるのか、「さよよし」同様、土地の威力への讚辞でありうるのか、今少し「さやけし」の語感を確かめる必要がある。幸い「さやけし」には「さや」を共有する語がある。「さやぐ」は「さやけし」と別語とする説(後述)もあり、迂遠なようだが、語の古層を探るため、まず「さやぐ」の用例から見ていくことにする。

(三) 「さやぐ」

B 天の忍穂耳の命、天の浮橋に多々志て詔りたまひしく「豊葦原之千秋長五百秋之水穂國は伊多久佐夜芸弓有那理」と告りたま

ひて……詔りたまひしく「此の葦原中国は我が御子の知らず国  
と言依さし賜へりし国なり。故此の国に道速ぶる荒ぶる国つ神  
等の多在りと以為ほす。是れ何れの神を使はしてか言趣けむ」  
とのりたまひき。 (『記』上巻)

前半は天の浮橋に立って地上を見下した天忍穗耳の命の言、後半  
はそれを受けた天照大神の言である。「いたくさやぎてありなり」  
とは「道速ぶる荒ぶる国つ神の多在」る状態で、〈言趣け〉られね  
ばならぬものである。『日本書紀』ではこの後半部分にあたること  
ろが次のようにも語られている。

(イ)彼の地に多に螢火の光く神、及び蠅声なす邪しき神有り。復草  
木威に能く言語有り。 (本文)

(ロ)葦原中国は……残賊強横悪しき神者有り。 (第一の一書)  
(イ)葦原中国は磐根・木株・草葉も、猶能く言語ふ。夜は標火  
の若に喧響ひ、昼は五月蠅如す沸き騰る。 (第六の一書)

「道速ぶる荒ぶる国つ神たちの多在」なる状態は「蠅声なす」  
「草木・磐根の言語」「沸き騰る」「喧響」なる状態でもある。こ  
の平定以前のさまは、次のようにも語られている。

(ニ)葦原の水穂の国は、昼は五蠅なす水沸き、夜は火釜なす光く  
神あり、石ね・木立・青水沫も事問ひて荒ぶる国なり。

(ハ)荒ぶる神たちを神攘ひ攘ひたまひ、神和し和したまひて、語問  
(『出雲国造神賀詞』)

ひし磐ね・樹の立・草の片葉も語止めて、皇御孫の尊を天降し  
寄さしまつりき。 (『遷却崇神祝詞』)

「道速ぶる国つ神たち」「残賊強横悪しき神」「釜火の光く神」  
「蠅声なす邪しき神」が「多在」にいて、草木・岩石・水沫までも  
が言語状態が「さやぎてありなり」であり、「神攘ひ神和し」「語  
止」めたことが「言趣け」である。いわば万物の精霊たちがそれぞ  
れに存在を主張して「喧響」なる状態が「さやぐ」であり、その無  
秩序の混乱が整序されたことが天つ神の平定であり、それを「言趣  
け」と言い「語止」めたというのであるから、「言趣け」とは言語  
による秩序化ということになる。「さやぐ」世界が草木・磐石・  
水沫までが「言語」としていているところに注意したい。

C さる川よ雲たち渡り畝火山木の葉さやぎぬ風吹かんとす

(『記』 二〇)

D 畝火山屋は雲とあ夕されば風吹かむとそ木の葉喧擾げる

(『記』 二一)

E 高浜の下風さやぐ妹を恋ひ妻と言はばやしことめしづも

(『常陸風土記』 五)

F ささの葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹思ふ別れ来ぬれば

(2・三三)

G 葦辺なる荻の葉さやぎ秋風の吹きくるなへに雁鳴き渡る

(10・三三)

H ささが葉のさやく霜夜に七重かる衣にませる子ろが肌はも

(20・四三)



C・Dは神武崩後の皇子の乱を知らせようとした伊須氣余理比売の歌で、木の葉の「さやぎ」は乱の予兆、不気味さを孕んだざわめきである。Eは茨城郡高浜の条・歌垣の歌と思われるもの、「下風さやぐ」が「妹を恋」う状況の表現であるからへさやぐは押さえられぬざわめきと解してよいであろう。Fは『万葉集』の用例、Fは人麻呂の石見相聞歌群の反歌の一首、「さやげども」は原文「乱友」で「乱」を「みだる」と訓む説もあるが、木の葉について「みだる」という例は他にないことだから今は「さやげども」の訓に従う。「さやぐ」の解釈は葉がざわさわと音をたてて騒がしく恐ろしい、さわさわと明るく澄んだ音が響くの二つに分かれている。Gは秋冷の気の到来を萩の葉のさやぎに感じとったもの、「さやぐ」を不気味なざわめきとは解し難い。Hは「霜夜」とあるから、Gと同様にとれそうではあるが、これは防人歌で旅の歌である。旅にあって妹を恋うのは家との紐帯を歌の世界に現出させて無事を願う呪歌のパターンであり<sup>10</sup>現実には独り寝即ち家にいる状況で欠いた不安があるのであり、「ささの葉のさやく霜夜」には一種の畏れが揺曳している。

歌における「さやぐ」の用例はEを除いて全て「木の葉」についてであり、さきに見た平定以前の葦原中国の「草木言語」と対応しているのではないか。とすれば不気味なざわめきと解する方がよい。だが、Gはその範疇に入らない。澄んだ秋の気配が葉ずれの音から感じとれるのだからこの「さやぐ」は明るく軽い葉ずれの音と解する方がふさわしい。Fの解が分かれるのはGのような用例があるからでもある。

C・Dの「さやぐ」とGの「さやぐ」ではかなり異なる印象をも

つ。そしてGの「さやぐ」は「さやけし」の語幹に近い。

『時代別国語辞典』はへさやぐとへさやけしを同根の語とし、へさやぐを竹の葉ずれの音、従ってへさやぐは「明るく澄んだ音」とする。しかしこれではC・DのへさやぐやBのへさやぎでありなりは理解できない。『岩波古語辞典』はへさやぐを喧響の意としへさやけしは「冷え」と同根の語とする。これではGがはみ出してしまふ。講談社文庫『万葉集(一)』はFの歌の脚注に「『さやぐ』は『さや』な状態であること。『さや』は耳目に顯著なこと。快適な情景も示すと同時に不安も示す(神武記歌謡―稿者注本稿のC・Dをさす)。ここは後者<sup>11</sup>」とある。『時代別国語辞典』とは異なる点でへさやぐとへさやけしを同根の語としている。これに従えば、BとHのへさやぐの全てが理解できる。ではへさやけしにもへさやぐのような幅はあるのだろうか。また、この幅は何を意味するのだろうか。

(四) へさやけし

I 大海の水底とよみ立つ波の寄せむと思へる磯のさやけき

(7・三〇)

I' 大海の磯もとゆすり立つ波の寄らむと思へる浜の清けく

(7・三三)

J 住吉の岸の松が根うちさらし寄せ来る波の音のさやけさ

(7・二五)

K 今日もかも明日香の川の夕さらす河蝦鳴く瀬のさやけかるらむ

(3・三六)

K' かはずなく清き川原を今日見ては何時か越え来て見つつ偲は

む  
K 佐保川の清き川原に鳴く千鳥蛙と二つ忘れかねつる  
(7・二三)

夕さらず河蝦鳴くなる三輪川の清き瀬の音を聞かくし良しも  
(10・三三)

(ハ) 神名火の山下響み行く水に川蝦鳴くなり秋といはむとや  
(10・三六)

(ト) 瀬を速み落ち激ちたる白波に河蝦鳴くなり朝夕ごとに  
(10・三六)

I Jは海浜の景であるが、Iは磯を、Jは波の音を「さやけ(き)」という。耳目に顕著という点ではこれらも理解できる。ここにある心情は快適なのか、不安なのか。寄せる波を常世波とすればこれは讃辞であろう。しかし、「大海の水底とよみ立つ」「岸の松が根うちさらし寄せ来る」は激しい波の様相である。海底を揺るがす怒濤・岸を侵食する波である。海神の威力への讃辞であれば激しさは活力として快いものであろうし、異界の支配力というのであれば不安でもあろう。

Kは「らむ」があつて想念の景である。どのような感情で思い起こされているかはk'くが示してくれる。流れと河蝦の歌をとり出して見たのだが、いずれも「清き」が流れに冠せられている点も、Kの「さやけし」と対応している。「見つつ偲はむ」「忘れかねつる」「聞かくし良しも」と賞美の辞がある。清き流れと河蝦は賞美の対象とされているのである。Kの景は賞美すべきものとして思い起こされていると見て良いであろう。(ハ)(ト)も流れと河蝦であるが、

「清し」の語はない。かわりに「山下響み行く水」「瀬を速み落ち激ちたる白波」と奔流の様相が描かれる。人麻呂吉野従駕歌の「清き河内」が「激つ河内」であるのに対応する。河蝦とはこのようなところにいるものなのか。K'くKの「清き」の実体は(ハ)(ト)の「響み行く水」「落ち激つ」速瀬である。I Jの寄せる波、(ハ)(ト)の流れのさまは平定以前の葦原中国の「草木言語」と並ぶ「青水沫事問」「水沸く」姿と重なるのではないか。しかしKはそうは見えない。(ハ)(ト)にしても激しい水の姿を描いてはいるが「秋といはむやも」「朝夕ごとに」は、Gと同様水音に秋冷の気を感じ、清爽の感を持っていることを示す。流れとかわずは賞美されるものとされているからで、K'くKがそのことを示している。

へさやけしはへきよしと共に水(波や流れ)、水辺(磯・浜など)に対して用いられるものが圧倒的で、次いで月光に用いられ、他のものに用いられるのは総数の一割程である<sup>12</sup>。この水のさまに用いられるということに留意したい。へさやぐと異なり、否定的な意に用いられた例はへさやけしには見出し難い。が、その対象とした水の様相は、その具象像を現す時激しいものを見せる。へさやけしへの淵源に「青水沫事問」「水沸く」へさやぐ世界があるのではないか。I Jや(ハ)(ト)からそれらが透けて見えているようである。

付言すればかわずに関して疑ってみることもできる。かわずとはかじかかみで鳴く音が澄んで美しいものだという。しかしかわずとはかじかかみを指すのではなく蛙類の総称だともいう。歌だから、賞美の対象となるものとして読み手の側がかじかかみかと思込んでいるにすぎないのかも知れない。同じく蛙類の一種ひきがえるは

「たにくく」といわれ「祈年祭祝詞」や憶良の歌に「谷嶺のさ渡る極み」とあって、地の果てに現れる。かわずがかじかではなく、「水沫事問」奔流のほとりに鳴くとしたら、清きへさやけきへ流れとかわずの音は平定以前の葦原中国、「さやぎてありなり」という世界に見えて来はしないだろうか。

K'Kはそうは見えない。賞美の語があるからであり、(ハ)も同じ枠内で読めるし、Kも同様である。そしてI'I'JはKと同様に「さやけき」が賞美の語となっていると見てよいだろう。

(田) へさやにへさやかにへあなさやけ

へさやぐの語感の幅、へさやけしへの賞美の語でありながら不安も感じうる激しさをほの見せている点、へさやぐとへさやけしへの微妙に異なる点、などを考えるのに、今少しへさやへにつらなる語を見ておこう。

L 衣手 常陸の国に 二並ぶ 筑波の山を 見まく欲り 君来ませりと 熱けくに 汗かきなけ 木の根取り 嘯き登り 峯の上を君に見すれば 男の神も 許し賜ひ 女の神も ちはひ給ひて時となく 雲居雨降る 筑波嶺を 清に照らし いふかりし 国のま秀らを 委曲に 示し賜へば 歛しみると 紐の緒解きて 家の如く 解けてそ遊ぶ…… (9・一七三)

虫麻呂作「検税使大伴卿の、筑波山に登りし時の歌」である。「清に」は「さやかに」「さやに」の両訓があるが、へさやを含まむ語であることに変わりはない。いつもは見ることの難しい筑波の

峯・国のま秀らを、筑波山の男の神の許し、女の神の加護によって「清に」「委曲に」見ることができた、というのであるから「清に照らし」「委曲に示し賜えば」の主語は筑波の二神、すなはち「清に」は「神威によってはつきりと」あるいは「神威あきらかに」と解してよいであろう。

M わが背子が挿頭の萩に置く露をさやかに見よと月は照るらし (10・三三五)

N 若月のさやにも見えす雲隠り見まくそ欲しきうたてこきころ (10・三四六)

O 日の暮に碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに振らしつ (14・三四〇)

P 足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹はさやに見もかも (20・四三三)

Q 色深く背なが衣は染めましを御坂たばらばまさやに見む (20・四三四)

Mの「さやかに見よ」は月の意志、意図的に擬人化した表現で、Lのように霊威という感じは稀薄であるが、発想の底流はつながっているのではないか。特にへきよしへさやけしは水の様に次いで月光を対象として用いられているという点でも見逃せない。月光は霊妙なるものと捉えられているのではないか。夜の世界にしか登場しないということもあるろう。「月の面を見るは忌むこと」と後代に言われるが一種の畏れの拭い去れないものであったと思われる。平定以前の葦原中国には「夜は火盆なす光く神あり」ともあった。

これが即ち月とは言えないが、夜の闇に光を発するものは畏怖の対象であったろう。Nは月そのものの現出を「さやけ」と言っている。Mの逆「さやかに見えぬ」であるが、「さやけ」には何か異質のものが顕在化するという意がありそうである。

Pは東歌上野国のもの、Pは武蔵国埼玉郡の上丁藤原部等母磨、Qはその妻物部刀自売の作。いずれも相手の袖振る行為が現実に見える位置にはいない。P・Qは「見る」というが、現実に見ることではなく幻視することであろう。袖振りは招魂の行為であるから、相手の袖振りが見えたというのは、そう感じられた、心に知覚したということであろう。ここに「さや(か)」が用いられている。「さや」は「耳目」にばかりでなく、感じられることも含むのであろう。靈感に訴えて顕著に、ということであろうか。

R雲雀あがる春べとさやになりぬれば都も見えず霞たなびく

(20・四三)

家持作。「さやに」になったのは「春べ」で、雲雀あがることでも霞たなびくことでもない。現実には雲雀の音や霞が春を確かに感じさせるのであるが、歌の文脈はそうはなっていない。「春」という「気」が「さや」なのであって、これも「耳目」にばかりでなく、「気」とでもいふべき「感じられるもの」が顕著であることを「さや」と言っていることになる。「気」という点では「さや」のGと通じる。

「さや(か)」はこれらの用例からすると霊妙な感をもつきわだちをいうように見える。「さやけ」が「さや」なる状態というの

はこの意味でBも包括できる。自然の神々が各々の威を発しているさまが「さやけ」だということになる。否定的に捉えれば、攘うべきもの・和すべきもの、即ち不安を感じさせるもの、であり、肯定的に捉えれば、きわだち・にぎわい・活力・威力即ち讃うべきものである。

もう一つ「さやけ」にかかわる語を見ておこう。

S当比之時、上天初晴、衆俱相見、面皆明白、伸手歌舞、相与称曰、阿波札、阿那於茂志呂、阿那多能志、阿那佐夜憩、竹葉声也 妖憩

『時代別国語辞典』が「さやけ」(「さやけし」)は同根の語で「さや」は竹の葉すれの音、従って「さやけ」は明るく澄んだ音とした、その根拠となった『古語拾遺』の天の石屋戸の前での天鈿女命の舞の段であるが、『旧事記』にも同様の注がある。「あなさやけ」は「あはれ」「あなおもしろ」と並列されている。賞讃の辞、快さをいうとしてよいであろう。ここで「竹葉声」というのは注意すべきである。『記』にはこの語はないが、鈿女はやはり「ささ」を手にしている。『万葉集』には「齋ささ」という語もあり、「ささ」は後世神楽の手草となった、さらに下って能では狂女が手にする。「ささ」は霊威の象徴となっているのである。「さやけ」が竹の葉すれの音「さやけ」に発した語というよりは、自然の神々が各々威を発するさまが「草木言語」ともいわれており、「ささ」はその象徴としてとり出されていると解する方がよからう。

Sの「さやけ」が賞讃の辞であることも注意すべきである。ここ



は靈威を称える語であり、その点ではLに近い。そしてI~Kの「さやけし」の賞美という点にもつらなる。I~Kは自然を賞美の対象としているように見え、SやLと全く同列ではないが、I~Kの古層にSやLがあると見てよいであろう。

㉞ <さよし>と<さやけし>2

<さや(か)に> <あなさやけ>を置いてみると<さやぐ>と<さやけし>は一つながりの語と見ることが出来る。<さやぐ>は<さや>なる状態をいい、<さやけし>はそれを賞美する語である。この場合<さや>は「耳目に顯著」といってもよいが付言すればもっと広く感覚的に捉えられる靈妙なるもの。そしてBでみた<さやぐ>とI~Kの<さやけし>のずれは<さやぐ>が<さや>なるものが「多在<sup>さよな</sup>」る状態であり、<さやけし>は特定のものがきわだっているという点である。「多在」る状態を無秩序というなら、特定のもののきわだちを賞美するのは「多在」るものからとり出されたものが位置づけられたことともいえる。Bのようなものが<さやぐ>の原義で、天皇を中心とする宇宙像が描かれることによつて賞美の語<さやけし>に転じた、即ち自然の神々が「言趣け」られた、そこで<さや>は不気味なざわめきから快いきわだちに転化させられた、<さやけし>の具象像が激しいものであるのは、<さやぐ>が<さやけし>に転化させられた時に奪われた本来の姿をとりもどすことであつたと考えることもできる。が、今は<さやぐ>は元来<さや>なる状態を言うもの、その場合<さやぐ>といわれた「もの」の威力(活力)の賞讃であり、<さやぐ>も元来賞讃の語であつたと考える。<さや>を共通させる<さや(か)に>

などからそう考えられるからである。そしてそれが攘われるべきものとされるのはBで見た、天孫降臨神話の文脈の中でのことにすぎない。降臨すべき地の既存者(神)の活力あるさまが「さやぎてありなり」なのであつて、葦原中国の側からすれば、地上の神々の威力の賞讃である。「草木言語」「青水沫言問」即ち、草木・水流・海波に代表される自然——山川の神・山祇・海神・川祇の神々の活力を賞讃する語だったのである。

a~c'の歌で、<清し><さやけし>が土地讃めと同時に天皇讃仰という二重の構造をもつのは、天皇を山川の神々に奉仕される超越絶対神とした宇宙像に於て、即ち人麻呂に始まり赤人ら宮廷歌人やそれを継承しようとした家持らの従駕歌や宮都讃歌に於てであり、その梓組を示す長歌のないものや従駕の題詞のないもの、例えばI~Kの歌などでは、単に自然の風光や景物を享受するように見えるのである。

多分<清し>は漢詩文の「清」と対応する和語(翻訳語か?)であり、「清き明き心」は「仕へ奉る」の抽象化された語であろう。<清し>は<さやけし>に比し語根を共有する語に乏しい。「清」を和語化した時、天皇中心の世界像が、自然の神々を従える——文化と未開という位置づけ——都と鄙・大宮人と海人の対応でもよい——という形でイメージ化され、山川の神々というとり出し方をし、水のイメージをそれに当てた、そのことが元来自然の神々の威力(「草木言語」「青水沫言問」)の賞讃の語<さや>を語根とする<さやけし>と対応して、<さよし><さやけし>は類同の語となつたのであろう。



(4) 付・〈波立つ景〉と〈旅の情〉

〈さやけし〉と〈さやけし〉は同根の語と考えられる。そして〈さやけし〉の方が賞讃の語としてきわだっている。それは〈さやけし〉が「多」であるのに対し、〈さやけし〉はとり出されたものに対して用いられているからであろう。とり出して賞讃することは位置づけることである。整理することは天つ神の側からの「言趣け」である。この位置づけが繰り返されれば、様式としての自然となる。I-Kの流れと河蝦や激しく寄せる波はこれにあたる。秩序化されるとは自然が様式化されて表現されるということでもある。

最後にそのことについて少し述べておきたい。

巻七には羈旅歌と題する一群の歌九十首がある。讃歌の世界で培われた感性をもって自然を発見し新しい歌の境地を展き赤人の所謂叙景歌の基盤になったといわれる。が、ここに展げた歌における自然の表現は、讃辞に支えられたものは具体的叙述に乏しく、具体的叙述のあるものは多様性はなくむしろ類型的で、「騒ぐ波」に関して特徴的である。この内容を今便宜上阿蘇瑞枝氏の分類に従って示すと、次のようなものである。<sup>17</sup>

<p>I</p> <p>(一) 叙景を中心とする 十一首</p> <p>(二) 旅中の感概をこめた叙景 五首</p> <p>(三) 旅中の風物に対する讃嘆 十六首</p> <p>(四) 著名な土地・風物に対する憧憬 三首</p> <p>(五) 特殊な風物に対する感動 三首</p> <p>(六) 思い出の景を回想する 一首</p> <p>44首</p> <p>1 波波 1 潮流 波2 波3 波4 1 鳥 4 鳥 6</p>
--

(5) 山名・地名に対する興味 三首

(6) 旅の守護神に対する祈誓にかかわる 三首

(7) 家郷を偲ぶ 八首

(8) 山の名に触発されて妻への恋情をうたう 四首

II (9) 妻への恋情をうたう 二首

(10) 土産として貝や玉を拾う 三首

(11) 旅中の人を思いやる 二首

III (12) 大宮人をうたう、あるいは官人としての自負をうたう 五首

(13) 旅中の心細さ辛さをうたう 十三首

(14) 相聞歌謡 九首

氏は十六種に細分されたが、大別すると旅の歌は三種である。ただし(14)の相聞歌謡は土地に流布していたものとして旅の歌からははずす。Iは旅先の地にかかわるもの、IIは家郷と結びつくもの、この二種は旅の無事を祈る呪歌に発したものであるが、IIIは、それらに発し、それを脱した如く旅そのものを歌うものである。Iでは(3)の十六首が最も多く、「見れば飽かぬ」「また還り見む」「恋ふ」「過ぎかてぬ」「よく見る」などという讃辞に支えられ、景の具体的叙述には乏しい。(一)・(二)は(三)のような土地讃めの発展したもので、景の具体的叙述がなされているものであるが、あわせて十六首のうち、鳥の景、波立つ景がそれぞれ七首ずつある。具体的景の叙述もきわめて類型的で多様性に乏しいという所以である。Iのうち波立つ景は他にも(四)に二首、(五)に一首、(六)・(七)に一首ある。またIIIに属する(13)十三首のうち十首までが波立つ(さわく波)景

であり、(四)は全て海浜・船津のものである。旅の不安が波立つ景に於て描き出されているのである。

(イ)若狭なる三方の海の浜清みい行き還らひ見れど飽かぬかも  
(7・二七七)

(ロ)求食りすと磯に住む鶴明けされば浜風寒み己妻呼ぶも  
(7・二九六)

(ハ)藻刈舟沖漕ぎ来らし妹が島形見の浦に鶴翔る見ゆ(7・二九九)

(ニ)天霧らひ日方吹くらし水茎の岡の水門に波立ちわたる  
(7・三三三)

(ホ)粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門波いまだ騒けり  
(7・三〇七)

(ヘ)印南野は行き過ぎぬらし天つたふ日笠の浦に波立てり見ゆ  
(7・二七六)

(ト)大海の波はかしこし然れども神をいはひて船出せばいかに  
(7・三三三)

(チ)足柄の箱根飛び越え行く鶴のともしき見れば倭し思ほゆ  
(7・二七五)

(リ)鳥じもの海に浮きゐて沖つ波さわくを聞けばあまた悲しも  
(7・二八四)

(イ)は(三)に属する。一・二句は場の提示、四・五句は讚辞、景の叙述は「浜清み」にしかない。讚辞に支えられて具象像に乏しいという所以である。(三)にはさきに引用したIJも入るが、景の具象像が比較的詳しいのはこれらである。「清し」が他に用いられ、それら

から「浜清み」の像を読み手は描くことになる。(ロ)は(一)、(イ)は(二)に属するもの、「見ゆ」は(一)に五例、(二)に二例、「波立てり見ゆ」は(一)に一例ずつある。つまり、国見型を踏むこれらは讚辞に発したと考えられる。波立つ景・鳥の飛翔は土地讚めに属するものであったという点に注意したい。地(海神?)の威力として騒く波が歌われると考えてよいであろう。「見ゆ」をはずしても騒く波が歌われることは地の神への賞讚を揺曳していたからと見てよからう。一方で、騒く波は就航の不安と結びついてもいたであろう。国見に属する(イ)や(ロ)の(イ)がそれを示す。旅の無事を願う神を称え、その地を賞讚する、それが地の神の威力として騒く波を歌う、そのことが、やがて、呪歌の域を脱した如く、旅の不安そのものを前面にせり出させてくる。(ハ)に属する(イ)がそれである。一方鳥の飛翔も一種のにぎわいとして讚歌のうちにあったことは舒明国見歌の「鷗立つ立つ」(1・三)などに求められようか。国見型の(イ)、これは讚歌の型をもちながら、「妹が島形見の浦」が旅人の関心のあり所を示していよう。(ロ)も同様、叙景でありながら妹と離れているわが身が重ね合わせられている。鳥の景は妹への思いを引き出している。(イ)は(ハ)に分類されたもの、こちらは「倭し思ほゆ」と表現されている。鳥の生態に重ね合わせて(イ)があり、(ロ)がある。

卷七の羈旅歌群は呪歌に発し、旅を詠じたものだが、呪歌の型を踏み、描き出した自然の具象像は「波立つ景」と「鳥の飛翔」に於て類型的であり、なかでも「波立つ景」はⅢに属する(ハ)の十三首中十首を占めていて特徴的である。これは「へきよし」「へさやけし」が「青水沫言問」世界を淵源として深くかかわっているのではないか。それが地の神への賞讚であるが故に「騒く波」を詠い

続けることが可能であったと見てよからう。一たびはへきよしへさやけしへが賞讃として位置づけられたからこそ、次いでその具象像を現すことが可能であったのはK・K'・K'・(h)で見たところである。巻七羈旅歌群がへ波立つ景へ騒く波の景へに於て特徴的であるということも、同様に見られるであろうことを右の(一)・(二)に属するものについて述べたのであるが、特に旅の不安を歌うものに於て顕著であることは注目に値しよう。

へきよしへさやけしへと位置づけられることは天皇中心の宇宙像に於てであり、それは元来の「青水沫言問」へさやぐへ世界のものではなかった。激流・騒く波・活力をもつと同時にあるいはそれ故に不安感をいだかせるもの、だからこそ賞讃して位置づけたのが讃歌の世界であり、その具象像が描き出されるとさらにそれにのせてさわく情(不安)が歌い出される。このさわく情とは位置づけられることで鎮められぬものである。位置づけられねば、それはまた位置づけられぬ不安をもつであろう。位置づけられぬ不安と位置づけられたことでもってしまった不安は、元来もっていたものとは異なる世界に組み込まれてしまったことから生じる異和という点では同じであろう。

表現の累積の上に引き出された世界であるがへきよしへさやけしへが天皇を中心に置く宇宙像の中で土地讃めであることがそのまま天皇讃仰になるという二重構造の不安定性を羈旅歌が鋭く先取りして、波立つ景を歌いそれに寄せて旅の不安を歌い出していったと見てよいのではないか。

巻七羈旅歌群は、叙景表現に於ては類型的で多様性に乏しいが、騒く波に寄せて旅の情——遂には漂泊感に向かうものすら(ゆな

ど)を引き出して一つの表現世界を展いたという点で注意すべきである。

へきよしへさやけしへは讃歌と共に影を細めるが、旅の歌に於て、新たな一面を展いていった。へさわぐ情への引き出しに一役買ったという点である。それはへきよしへさやけしへが「青水沫言問」——水(川祇・海神)の勢いを賞讃する語に発していたからであらう。

注1 「万葉集における清なるもの」(『吉野の鮎』所収)、「万葉文学その三」(『日本文学の環境』)

2 高野正美「新しい自然の発見」(『万葉集作者未詳歌の研究』所収)にへきよしへさやけしへは讃歌の衰退と共に影をひそめたという指摘は既にある。

3 「從駕歌の構造——清なる自然」試論1」と題して一九八三年二月上代文学会例会で口頭発表、別稿を用意している。

4 「見る」主体は作主舎人娘人でもよいが、從駕作であることからすれば天皇の位置で詠んでいると考えてよいであろう。国見は文献で見られる天皇の事跡とされており(拙考「国見と道行」シリーズ古代の文学4『想像力と様式』所収)、行幸における国見の意義に関しては注3で述べた。人麻呂吉野從駕歌も「登り立ち 国見をせせば」と天皇の国見を詠っている。

5 高木市之助氏がへ清なるものへといわれたのはへきよしへさやけしへの語の四分の三がへ清へ字で表現されており、両語は相通性が多大で、その点を問題とされたからである。(両語の間の差違と相通に関しては注2論文が詳細に検討している。)「きよみさやけみ」(6・九〇七)のように重ね用いられることもあり、また両語の類同性からへ清への訓の移動も見られる。

6 「清明心の発生——官廷寿詞から宣命へ——」(シリーズ古代の文学3『文学の誕生』所収)

7 講談社文庫『万葉集(二)』三三三ページ脚注。注8論文の説の適用。

8 中西進「清き河内考」(『万葉集比較文学的研究』所収)

9 拙考「小竹の葉はみ山もさやにさやげども——「さやぎ」と「乱れ」——揺れる外界」(『太田善磨先生退官記念文集』所収) はFの人麻呂歌について考察したもの、「さやげども」と訓む論拠や、その解釈の二種について検討している。参照されたい。

10 拙考「主題としての〈旅〉」(シリーズ古代の文学7『古代詩の表現』所収)

11 中西進全訳注、一一七ページ

	川・海	月	その他	計
きよし	58例	16例	10例	84例
さやけし	26例	3例	3例	32例
(ま)さやか(か)に	1例	4例	8例	13例

〈さやけし〉が対象とするものを『万葉集』の用例について分類すると上表のようになる

13 中西進全訳注、講談社文庫『万葉集』脚注の一例。「袖振る」は「魂を招く行為」、「見る」とは招魂を身体的に知覚すること、実際には目で見るとはならない。(『万葉集』三三七ページ)

14 「『さやぐ』と『さやけし』——歌のことは」(『人』一九八四・七)

16号(昭和五十二年三月三十一日)〔在庫なし〕

「記序」偽撰説批判覚書

万葉集卷十一・十二

—序詞の発想と民謡性とに関連して—

卷十四と卷二十のあいだ

「士」憶良の論—士の不遇によせて—

動物の発見

15号(昭和五十一年三月三十一日発行)〔在庫なし〕

万葉集中の人麻呂歌集の書式

—卷十・七夕歌群の用字の特殊性について—

菅野 雅雄

森 淳司

加藤 静雄

辰巳 正明

渡部 和雄

森 淳司

と題した一文にはそのように述べた。本稿はそれと重なる部分のあることをお断りしておく。

15 注10論文参照。

16 注2論文

17 「万葉集羈旅歌の世界」(『論集上代文学』第八冊所収)(一)は氏の種類されたもの。I~IIIは私見で分類、旅の歌の三種については注10拙論を参照されたい。(一)の順はI~IIIの分類のため入れ替えた。また(一)の中にも解釈によってはIIIに分類できるものもあるが、具体的叙述の有無多少を問題としているので入れ替えは行わなかった。その点も注10で触れている。なお下段の細字波鳥はそれに関する歌数を付したものである。

。(付)尾崎暢殊「み山もさやに」(『国学院雑誌』S59・10)・丸山隆司「音と……語生成あるいは文字をめぐる」(『同(統)』)「研究と資料」第十・十一輯S58・10、S59・7)は脱稿後惠投に与った。いずれも〈さやぐ〉〈さやに〉に関する考察を含むもので、本稿の不備を反省させられた。特に丸山氏は〈さや〉を擬声語として一般語への生成過程を考察されたもので、本論とは論の意図の違いは明らかで方法も異なるが、考えさせられることが多かった。

「天離る鄙」の意味

家持の孤独の認識論的研究・序論(比較論的に)

物語の発生についてのひとつの覚書

—大嘗祭の古詞中を心として—

夏期セミナー発表要旨

黄泉国と根国—死後世界の構造—

古代における死と文学・非常の死—靈異記の場合—

死を託する歌—過ぎにし人—

古代における死と文学—家持の屈折—

戸谷 高明

青木 節子

古橋 信孝

三浦 佑之

露木 悟義

町方 和夫

針原 孝之